琉球大学学術リポジトリ

「沖縄を読む」ことの意義について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-18 キーワード (Ja): 沖縄, 歴史認識, ディスカッション キーワード (En): Okinawa, awareness of history, discussion 作成者: 石原, 嘉人, Ishihara, Yoshihito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6747

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育 第4号, 2007

「沖縄を読む」ことの意義について

石 原 嘉 人

要 旨

本稿は読解教材『沖縄を読む　中・上級編』の作成意図および使用方法について記述したものである。この教材は，沖縄の歴史にかかわりの深い１４人の人物を紹介するとともに，現在の視点からその時代を検証している。学習者は設問に答えることで各自の個人的視点を述べ合い，議論することが求められる。そのような過程を通じて，沖縄の諸事情に対してより深い考察を行うとともに，沖縄で学ぶことの意義を再確認することが，この教材の狙いとなっている。

キーワード：沖縄，歴史認識，ディスカッション

1．はじめに

本稿は2006年度に印刷を予定している読解教材『沖縄を読む（中・上級編）』の編集方針について整理するものである。このテキストは、2007年度に発行を計画している『沖縄を読む（初・中級編）』と対をなすものであり，いずれも沖縄で日本語を学ぶ留学生を対象に，沖縄の風土や文物に関する基本的な知識を与えた上で沖縄に留学することの意義を再確認させることを目的として編集している。

『初・中級編』のほうは，沖縄の地理や歴史の基本的な枠組みについて，また「キジムナー」や「亀甲墓」等わかりやすい風物について説明した文章を載せ，それを正確に読み取ることが主眼となっている。その意味では，読解教材としての特徴は「沖縄を題材としている」ことに集約されていると言っていい。

それに対して，ここで取り上げる『中・上級編』のほうは，沖縄の歴史に関する理解を深めつつ，沖縄に留学したことの意義を自らに問いかける仕掛けになっている。つまり，読解力の向上や知識の獲得だけでなく，留学生活について内省して留学の意義を再考させるというアプローチを取っているのである。こちらのテキストでは，沖縄の歴史に関わる14名の人物を紹介しており，それぞれの課にひとつのテーマが隠されている。授業では，そのテーマに沿ったディスカッションを行うための課題が設定されている。

以下，『沖縄を読む（中・上級編）』の内容を追いながら，このテキストの作成意図と予想

される効果について，項目ごとに記述する。

目次と各課のテーマ

1. 源為朝と羽地朝秀（歴史認識について）
2. 尚真（琉球王国について）
3. オヤケ・アカハチとサンアイ・イソバ（辺境と同化）
4. 謝名親方（侵略と殉国）
5. 恩納ナビーと吉屋チルー（琉歌と沖縄の女性）
6. 太田朝敷（マイノリティー意識）
7. 柳宗悦（伝統と近代化）
8. 牛島満（祖国と玉砕）
9. 瀬長亀次郎（アメリカの占領と「民主主義」）
10. 金城夏子（戦後の混乱期）
11. アルベルト城間（世界の沖縄人）

2．取り上げた人物群

2-1. 歴史認識

最初に取り上げた人物は，源為朝である。彼が琉球王朝のルーツをヤマトに求める俗説の主人公であることには，多言を要さないであろう。ただし，沖縄における為朝伝説の発端は羽地朝秀が編纂した歴史書であることを鑑みて，本書では為朝本人に関する記述は控え，テキスト本文では「為朝伝説はどのように作られたのか」を主眼に，羽地朝秀の置かれた時代と立場について簡潔にまとめた。そして，歴史認識というものは，固定的であり永続性を有するものであるのか，あるいはその時代その時代の都合に合

わせて恣意的な解釈がなされるものなのか，という論点でディスカッションが進むよう，本文の後にいくつかの質問を配した。

第一課にこの項目を置いた理由は，ヤマトと沖縄の歴史的な関係を大枠で理解してもらうだけでなく，「歴史を知ることは現在という立脚点を確認する作業に通じる」ということを前提として，このテキストを読み進めていけるよう願ってのことである。そのため，「歴史を認識すること」それ自体について議論できる題材を選んだのである。

２－２．中央集権と辺境

次に紹介する人物は尚真王である。琉球王朝の栄華を体現した人物であり，また「沖縄文化」の基礎を築いた時代を紹介するのに最適であると考えて取り上げた。尚真王の業績の中心にあるのは「中央集権」であり，その結果として平和がもたらされたという点であることは，周知のとおりである。

しかし，その事実を別の角度から見ると，まったく異なる視点が得られる。そこで，琉球王国に併合された側の代表として，その次にオヤケ・アカハチとサンアイ・イソバを取り上げた。日本と沖縄の関係については，日本という巨大な同化圧力に翻弄される沖縄のイメージが語られやすいが，その関係を琉球王国と周辺諸島に当てはめることも可能であることをここで示し，多角的な見方が可能であることを示唆したのである。地政学的に見れば，沖縄は世界中のどの地域においても想定できる「中央」と「地方」の入れ子型構造を，可視化して実感することが容易な歴史的状況を持っていると言える。

２－３．非武の思想と殉国の思想

尚真王の時代に関連するもう一つのテーマは，「非武」である。琉球王国が平和理念によって武器を放棄したというのが俗説だったとしても，内戦と殺戮が日常化していた同時期の日本と比べれば，はるかに平和で武器コントロールが行き届いていたことに異論はないだろう。それは，平和主義による貿易立国を目指した戦後日本の姿と重ね合わせることも可能なはずである。

しかし，そのことを薩摩による侵略を防げなかったという事実によって検証すれば，「非武」の思想を賞賛してばかりもいられない。かといって，武力による防衛が可能であったという目算があるわけでもない。平和を享受することと平和な社会を維持することの困難さを，沖縄の歴史はドラスティックに示している。

この視点は，暴力を回避し相手を尊重しながら理性に働きかけ対話での解決を求め

ようとしている米軍基地反対派住民と，それを見越して基地負担の永続化を目論んでいるかのごとき米日両政府との関係を理解する際にも役立つはずである。私見では，米軍施設または那覇防衛施設局に対して自爆テロなどの武力行使が繰り返し行われれば，米政府は米軍の沖縄駐留を放棄するはずなのに，「非武」という思想的伝統を持つ沖縄人（ウチナーンチュ）の良識がそれを阻んでいる，というのが沖縄の現状である。決して暴力に訴えない「気高さ」と，その代償として外部から押し付けられる暴力装置の存在を（日々の騒音や頻発する犯罪によって）身近に感じることができるのが，現在の沖縄なのである。

過去にも現在にも通底するこのジレンマを直視することで，留学生たちの平和に対する認識を深めることが可能であると思われる。そのことは，次に取り上げる謝名親方への評価を定める際にも影響を及ぼすであろう。

気骨の士・謝名親方については，戦慣（いくさ）れした薩摩の圧倒的な武力を前に，ただ一人屈服を拒否した人物として英雄視することが可能である。しかし，理念に準じて死ぬことを賛美するかどうかについては，別の課で取り上げる牛島満のケースで改めて問いかけることになる。

プラグマティックな成果を求め，力の強い敵に対して屈服することも厭わない姿勢と，採算を度外視して自らの美学に殉じる姿勢のどちらを「美しい」と看做すか，個人差があって当然である。さらに，その美学を個人の内面に押しとどめるのか，それとも同胞と信じる人々に対しても同様に求めるのか，という視点に立てば，薩摩（あるいは米軍）による武力攻撃という国難における個人の生き方について，議論が深まるだろう。そのことは，21 世紀における「自爆テロ」の背景を理解することにも繋がるはずである。

2－4．沖縄の女性像

このテキストでは，14 名の人物を紹介するのであるが，沖縄の歴史教科書で取り上げられている人物の多くは男性であり，女性の登場率が極端に少ない。そこで，恩納ナビーと吉屋チルーの両名を紹介し，琉歌を鑑賞する課を設けた。この課は，深い議論に結びつくような題材ではないが，全体のバランスを考えると文芸について紹介するページも必要であろうと考えたのである。

もう一人，現代の沖縄女性像を代表するものとして，金城夏子も紹介した。「密貿易とセンカの時代」を象徴する存在でありながら歴史の表舞台で語られることが少なかった彼女をここで取り上げたのは，米軍統治下の沖縄について紹介したかったのと，国家や制度の枠組みを抜け出してしなやかに自立する沖縄人のイメージを表象してい

ると考えられるのが理由である。

2－5．マイノリティー意識

いわゆる「琉球処分」により日本国沖縄県民という概念が創出され，その結果として沖縄県民の日本への同化が始まり，同時にマイノリティーとしての自意識が浸透するようになった。この間の経緯を理解するために，「人類館事件」に関連して太田朝敷を，「方言論争」に関連して柳宗悦を，それぞれ取り上げた。

前者においては「差別される側」が「差別する側」の論理に絡め取られていくプロセスを読み取ることができるため，そのような論理を克服するための思想的枠組みについて議論することを求めた。後者においては「近代化」と「伝統保持」の相克がテーマとなり，方言を守ることの意義だけでなく，今日の観光客が沖縄に向ける視線についても議論を投げかけている。

いずれの議論も，過去の出来事でありながら，今日的な課題を孕んだ内容であると言えるだろう。

2－6．アメリカの占領と「民主主義」

瀬長亀次郎を取り上げたのは，戦後の沖縄が日本（内地）と異なった歴史を歩んできたことを確認するためである。日米両政府にとって好ましからざる人物としてマークされ続けた瀬長が，なぜ沖縄県民の支持を集めることができたのかを，時代的な背景とともに読み解いていくのがこの課の主目的である。

米軍による統治がどのようなものであったかについては，内地に住む日本人の多くが認識しておらず，「アメリカ政府に統治されていた」「アメリカ人として英語で教育を受けた」というふうに誤解している人も少なくない。また，在日米軍基地の75％を国土の0.6％の沖縄県に集中させた背景に，平和憲法によって人権が守られた内地とそれが適用されなかった時代の沖縄があることなどを理解することで，本土復帰運動の動機について議論することが可能になる。このことは，米軍が侵攻することで新たな混迷を招いている世界各地の情勢を理解するためにも役立つはずである。

2－7．在外沖縄人（ウチナーンチュ）

最後の課には，現在の沖縄を表象する人物を取り上げるべきであろう。当然，現役として活躍中で，沖縄の将来像を示唆する人物が相応しい。また，これまで取り上げてき

た話題の中で触れられなかった「芸能」と「移民」に関する話題をここで取り上げたかった。いずれも現在の，そして将来の沖縄像を語る上で欠かせないトピックだからである。

となれば，アルベルト城間が最適であることは，説明を要さないであろう。日本の一地方としての「沖縄県」ではなくて，世界に広がる「ウチナーンチュ・ネットワーク」のキーパーソンとして，また日本という枠組みに押し込まれないOkinawan identityの具現者として，彼の半生を紹介するのである。そのことは，ローカリティを備えつつグローバルに生きることが求められる時代の留学生たちにとって，いくつかの示唆を与えることになるはずである。

3．まとめ

小論では，開発中の読解教材について紹介しつつ，その狙いと意義を述べてきた。最後に，学生がこのテキストの理解を深めるために議論する際の手がかりとして提示した課題の例を挙げておく（柳宗悦「方言論争」の課題の一部）。

このような課題を元に議論を進めることは，「沖縄を学ぶ」ことによって，より広い視野を獲得することにつながってゆくはずである。一部の課については，既に2006年度春学期の「日本語Ⅴ」の講義で使用したが、その反応は上々であった。議論が盛り上がらなかった部分については，講義後に修正を施した。

課題：次の二つの意見に対するあなたの考え方を述べなさい。

［意見A］ 沖縄は近代化しないで，伝統を残すべきだ。東京と同じような快適で便利な生活を求めていたら、つまらない社会になってしまう。もし，不便な点を我慢して，昔のままの生活を続けたら，観光客が今より増えるはずだ。

［意見B］ 方言が弱くなって共通語が普及すれば，社会が安定するし，地方の人にも成功のチャンスが与えられる。同じように，英語がもっと普及すれば，世界は安定するし，どこで生まれた人にも平等に国際的な成功のチャンスが与えられる。

課題：あなたの国にも，地方語を禁止した歴史がありますか。あれば，それを簡単に紹介してください。

参考文献

Moriteru Arasaki 編 (2000)『Profile of Okinawa 100 Questions and Answers』Techno Marketing Center

演劇「人類館」上演を実現させたい会編(2005)『人類館　封印された扉』アットワークス

小熊英一(1995)『単一民族神話の起源』新曜社

小熊英一(1998)『＜日本人＞の境界』新曜社

新城俊昭(2001)『高等学校　琉球・沖縄史』東洋企画

高良倉吉(1993)『琉球王国』岩波新書

与並岳生(2005-2006)『琉球王統史』第１巻～第20巻　新星出版

（琉球大学留学生センター）

Value of "Reading Okinawa"

ISHIHARA, Yoshihito

Keywords: Okinawa, awareness of history, discussion

Abstract

This report makes a description of the intention to edit the textbook "*OKINAWA WO YOMU for intermediate and advanced level*" and how to use it. This textbook introduces 14 people who have deep concern with Okinawan history and looks over their period from the present point of view. Reading these brief biographies, students have to answer the questions to observe their own opinions and make discussion. The main target of this textbook is to understand various matters on Okinawa and reconfirm the value of learning at Okinawa.

(University of the Ryukyus)